

ばいであ社会体験活動:--さいたま市立漫画会館へ 「植田まさし原画展」を観に行こう!

2018年10月2日(火)

「コボちゃん」でお馴染みの4コマ漫画家「植田まさしの原画展」が埼玉県さいたま市大宮の漫画会館で催されると言うので、台風24号が過ぎ去った青空の下、足を運ぶことにした。

数年前まで、子どもが主役の漫画と言えば、一方はストーリー漫画、他方は4コマ漫画という違いはあるが、「クレヨンしんちゃん」と「コボちゃん」が双璧をなしていた。残念なことに「しんちゃん」の作者が不慮の死を遂げ、「しんちゃん」は「永遠の5歳」の称号を得ることになった。

逆に、同じく5歳の子どもが主人公として始まった「コボちゃん」の場合は、初めから成長物語として想定されていたのか、小学生としての「コボちゃん」漫画が描かれることにもなった。

とにかく、子ども特有の視点を考察する場合には、小学校に進学する以前の世界を描いた「しんちゃん」と「コボちゃん」に優るものはない。

なぜ、小学校に上がる以前の幼稚園時代の子どもの視点が大事かと言えば、そこにはまだ大人の論理が支配的な学校教育に染まる前の、「本来の子どもの姿」が見られるからである。

ただし、「しんちゃん」と「コボちゃん」では大きな違いがある。大人の常識にとらわれずに子ども時代を存分に謳歌している「しんちゃん」は小学校に上がったならばおそらくとんでもないトラブルメーカーになったであろうことは容易に想像がつく。逆に、幼稚園時代から極めてありふれた平均的な子どもとして描かれている「コボちゃん」は学校教育の中でも最も子どもらしい子どもとして学校生活を送るであろうことも容易に想像がつく。

この決定的な差は何なのか、もし真剣に考察すれば、子ども論の展開としてとても興味深いものがうまれるのではないか。そういう興味も含めて、今回、植田まさしの代表作「コボちゃん」「かりあげクン」「おとぼけ課長」「フリテンくん」の4作品の4コマ漫画の原画を見に行くことにした。

なお、10月8日(祝・月)午後2時から、漫画会館2階にて、「植田まさしトークショー」が開催されるそうである。(受け付けは締め切っているようだが…)

